

白隠慧鶴と女性弟子 一尼僧の場合一

竹下 ルツジェリ・アンナ（京都外国語大学教授）

近世日本では、修行に励み、活躍した禅宗の尼僧が多数存在していた。彼女らは女性に厳しい近世の封建的な身分制の家父長制的社会に生き、さらに仏教界および儒教の思想から発生していた女人不成仏や変成男子、五障三従、血の池地獄、女身垢穢などの概念による強い男尊女卑の中で日常生活を送っていたにもかかわらず出家を選び、仏道を歩んできた。

本発表では、特に「臨済宗中興の祖」として知られている白隠慧鶴（1686-1769）の女性弟子（尼僧のみ）について論じ、彼女らの生き方と修行の仕方を分析する。

白隠の女性弟子は、主に白隠の高弟東嶺円慈（1721-1792）が著した『白隠和尚年譜』（正式名は『龍澤開祖神機独妙禅師年譜因行格』、1820、以下『年譜』と略す）および白隠下四世の妙喜宗績（1774-1848）による『荊棘叢談』（1842）に記録されている。後者には白隠門下の尼僧と大姉を合わせて五人の女性が登場する。その中で、唯一の尼僧は、江尻海船寺の恵昌尼（?-1764）である。『年譜』では、さらに大橋女（後に慧林尼、年没年不詳）について書かれている。

また、『曹洞宗尼僧史』（1955）によると、太巖祖仙尼（1731～1811）は四年間白隠の下で修行し、「洞山五位」の公案の指導を受けた。もう一人は、伊豆国の臨済寺で行った白隠による『碧巖集』の提唱に参加した智光尼（駿州清見寺徒）である。

確かに、白隠は日本曹洞宗の開祖である道元希玄（1200-1253）や江戸時代に生きた臨済宗の盤珪永琢（1622-1693）と違って、尼僧の弟子は少なかった。さらに、白隠は未完成の「地獄極楽変相図」（清梵寺蔵）のなかに池のような場所に入っている女性たちを描いている。彼女らの前に蓮の上に座っている菩薩のような姿があることから、「血の池地獄」であると考えられる。しかし、白隠の多数の作品からも窺えるよう、修行は尼僧と僧侶に限らず、出家か在家、年寄りか子供、女か男を問わないと白隠は思っていたということが分かる。

特に晩年に白隠は、老若男女僧俗を問わず「隻手の音声」の公案が修行において大きな役割を持つと考えていた。白隠がこの公案を発明したことによって、庶民の大勢が、僧侶・在家、男・女、老・若の区別のない状況で、修行をすることが可能になった。驚くべきことは、白隠門下の僧俗の中で、最も若くてさらに在家の女性で「隻手の音声」を透過できた者は15歳の少女である（『於仁安佐美』巻之下、1752）。

白隠の教えの大きな特徴は、老若男女を超えた修行方法であると思われる。女性弟子の生涯だけではなく、本発表ではこのようなジェンダーレス的な修行観を表す『於仁安佐美』などの白隠の作品も紹介する。

キーワード：白隠慧鶴、尼僧、『於仁安佐美』